

「探求の過程」として展開される体育学習 ～3つの対話で運動の「おもしろさ」を発見し創造しよう～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかかわって

①体育における「学び」と「学びをデザインする」こと

本校の学校提案は「学びをデザインする子どもたち～つなぐ・つむぐ・つくる～」である。この学校提案を受け、今年度体育部では、『「探求の過程」として展開される体育学習～3つの対話で運動の楽しさを発見し創造しよう～』を研究テーマとした。

体育科の目標である「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」ためには、運動を楽しむことのできる力が必要であると考え。そこから体育における「学び」を、運動を楽しむ力を育てるものとし、「学びをデザインする」とは、その力が育っていくプロセス「探求の過程」そのものを学習内容として、取り組みを進めると捉え、本研究に取り組んでいく。

②体育における「つなぐ・つむぐ・つくる」

i) つなぐ

子どもと課題(運動)	子どもたちが「やってみたい」と思えるように、取り上げる運動の「おもしろさ」をはっきりさせ、子どもと課題(運動)をつなぐ。
子どもと子ども(集団)	取り組んでいる運動の「おもしろさ」広げたり、新たに見つけたりできるように、子ども同士をつなぐ
子どもと自己	自分の体を思い通りに動かせるように、子どもと自己をつなぐ。

ii) つむぐ

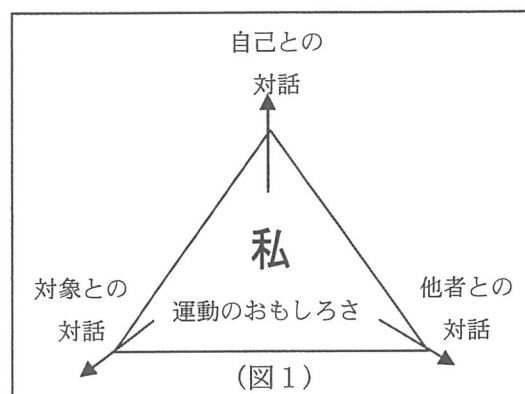
1時間における「つむぐ」とは、運動に取り組む中で、仲間と交流し、「おもしろさ」について新たな発見や考えを更新していく取り組みである。単元における「つむぐ」とは、話し合いなどを通して、「運動のおもしろさ」を広げたり、発見したりする課題解決へと向かう過程にある多様な考えを整理していくものである。

iii) つくる

上記の「つなぐ」「つむぐ」ことにより、新たな自分を「つくる」ことである。そのためには、どんな状況から学習がスタートし、どのように変容してきたか、どんな課題にぶつかり、どのように解決しようとしてきたのかなど、学びの足跡を可視化させることで、子どもが自己の変容を実感し、新たな自分に気づくことができるようになる。

③体育における3つの対話

松田によれば「運動は『1つの固有なおもしろい世界』であるから、運動の世界の三角形の頂点になっている『自己』『他者』『モノ』のどれかを内側から伸ばすことができれば、三角形自体が広がり、面積も大きくなる、つまり子どもにとっての運動が広がり、深まることになる。」としている。この視点に立ち、「自己」「他者」「対象(モノ)」3つの対話の充実によって運動の楽しさ(＝三角形)を発見し創造していくことが、体育における「学び」であると考え。(図1)



岡野、伊藤らは体育における3つの対話を次のように捉えている

自己との対話 (身体技法の形成)	自らの体そのものを道具として「運動の中心的なおもしろさ」に参加するために使用する方法。
他者との対話 (仲間との課題の探究)	単元で取り上げる運動の文化的な価値を明らかにし、それに伴う身体技法から導き出された課題を仲間と探究する営み。道徳主義的な仲間とのかかわりを指すものではない。
対象との対話 (運動世界への参加)	「運動の中心的なおもしろさ」に参加すること。文化遺産としての技を獲得する行為ではない。

(図2 ii)

これらを参考に、本研究では「自己との対話」を「できた」「もうすこしでできそう」など体を通して技能が身についたことを実感すること、「他者との対話」を「教え合い」「みんなが楽しめるルールづくり」など友だちとのかかわり合いながら課題解決に取り組むこと、「対象との対話」を「やってみて楽しい」「こうするとおもしろい」など運動の特性に触れたり広げたりすることとした。

本研究において、「体育における『3つの対話』によって運動の楽しさを発見し創造していくことができると仮説を立て現在実践、検証中である。

(2) 体育科でめざす子ども像

授業や休憩時間の運動の様子、体力テストの結果などから子どもたちの体力の二極化が見られる。このことは、体育における教え合いやかかわり合いを阻害し、その差をさらに広げる悪循環を引き起こすと考えられる。

1つめは「学びの見通しをもてていない」ことである。「できる子」「できない子」問わず、多くの子どもたちにこれが当てはまり、特に運動経験の乏しい子どもにとって明らかである。これまでの研究からも、子どもたちは「これをするこで、こうなっていくはずだ」「ここを直せば、きっとできるようになる」という見通しをしっかりともてていないので、授業では情意面で友だちとのかかわり合いが活発になる一方で、技能面ではそれほどでもない様子が見られた。

「体育、運動の捉え方」である。「サッカーとは…」「マット運動とは…」というある程度の「固定観念」を子どもたちがもっていたり、これまでの運動経験から「これはできない」「苦手である」という先入観をもっているため、思うように楽しめなかったり、気づきや考えを出しにくくなったりしていることが考えられる。例えば「上手な子の言うルールが正しい」「鉄棒は逆あがり、縄跳びは2重とびができなければいけない」などである。

以上の2点から、「体育科でめざす子ども像」を考えると、取り組む運動に対する固定観念や先入観にとらわれず、体を動かして楽しみ、柔軟な発想で運動をより楽しむための見通しをもって活動できる子どもの姿こそが、本校の体育科でめざす子ども像といえる。

2. 体育学習における「学びをデザインする子どもたち」

本校の体育学習における「学びをデザインする子どもたち」とは、取り組む運動の楽しさを広げたり、新たに発見したりする、「課題解決」に向けた活動の過程そのものを探求していく子どもたちの姿である。学年段階を3つに区切った下の表1は、体育における課題解決・対話・学び方の3つの観点において、期待している子どもの姿である。

	低学年	中学年	高学年
課題解決	友だちや教師と共に、運動の楽しさを広げることがめざして学ぼうとする	友だちや教師と共に、運動の楽しさを広げる課題を見出し、その解決に向け、見通しをもって学ぼうとする	学びの経験を生かし、運動の楽しさをより広げる課題を見出し、その解決に向け、見通しをもって学ぼうとする
対話 ☆は特に充実させたい対話	<u>☆対象との対話</u> 対象の中で遊ぶ活動を通して、楽しさを味わう <u>自己との対話</u> 運動に必要な、基礎となる体力をつける <u>☆他者との対話</u> 友だちの姿から、新たな課題を見つけ、取り組む	<u>☆対象との対話</u> 対象のもつ「運動の中心적なおもしろさ」に気づく <u>☆自己との対話</u> 運動をより楽しむための技能を身につける <u>他者との対話</u> 友だちの姿や他のチームのよいところを知り、自分の新たな課題を見つけ、解決をめざす	<u>対象との対話</u> 対象のもつ多様な「運動の中心적なおもしろさ」に気づく <u>☆自己との対話</u> 運動をより楽しむための幅広い技能を身につける <u>☆他者との対話</u> 友だちの姿や他のチームの様子から、自分やチームの新たな課題を見つけ、仲間と解決をめざす
学び方	教師や友だちの真似をしながら学びを広げようとする	これまでの学び方を目的に応じて活用しようとする	これまでの学び方を目的に応じて選択し、活用する

(図3 体育科において子どもたちが学びをデザインする姿)

実践例 「体づくり運動 多様な動きをつくる運動」1年の実践から

3つの対話を3色のカードに記入し、個々のみとりと支援にいかす。

3つの対話	色	記入する内容
対象との対話	水色	「楽しかった」 「楽しくなりそう」 と感じたこと
自己との対話	ピンク色	「できた」こと
他者との対話	黄色	「友だちとした」こと

(図4 3つの対話の色と内容)



(図5 3つの対話を記入する)

しんじ君のカードから見た「学びをデザインする子どもたち」

(5/8時間)

(6/8時間)

(7/8時間)

イルカショーのボールを2個にしたいな (水色)

イルカショーのところで〇〇くんと一緒にしたよ (黄色)

〇〇くんと一緒にボールをたたけたよ (ピンク色)

5/8時間目のときにしんじ君が水色のカードに「(たたく) ボールを2個にしたい」と書いていた。そこで6/8時間目で場の変更(ボールを2こぶら下げる)をしたところ、しんじ君が友だちと一緒に(タイミングを合わせて)ボールをたたこうとする様子が見られた。この日、しんじ君は初めて黄色のカードを書き、運動の楽しさを広げることができたと言える。そして、この時はうまくいかなかったが、次の7/8時間目に「いっせーの一で」と声をかけ合うことで成功し、ピンク色の

カードにつながっていった。また、しんじ君の「みんなもやってみてね」の言葉を受けて、真似をする子がたくさん出てきた。その中にはゆうと君のように、「競争」という新しいルールをつくる子どもも出てきた。

3. 研究の展望

「3つの対話によって運動の楽しさを広げる子ども」をめざすために、以下のようなことを大切にして研究を進めていく。

- 単元の運動について、「味わわせたい楽しさ」「できるようにさせたいこと」「友だちとのかかわ合い」の3点をどう扱っていくかを明確にし、かつ授業展開に応じて柔軟に対応していく。
- 毎時間「3つの対話」などをワークシートやカードに記入、交流する機会をつくる。
- 3つの対話の広がりが見えるような、掲示物やプリントを子どもたちに見せながら授業を進めていく。
- 3つの対話から子どもをみとり、道具、場、ルール、チームを子どもと一緒に変更、追加していく。
- 主体的に活動ができるよう、場や道具の準備、後片付けはできる限り子どもたちの手で行わせる。

4. 研究の評価

方法として、実際活動している様子を観察、記録し、学習カードやグループ（チーム）ノートなどから、自己課題をもっているか、3つの対話ができているか、偏りはないかなど、子どもたちがどう学びを進めているのか見ていく。また単元の初めと終わりにアンケートや作文を書かせ、取り組んだ運動に対する考え方の変化や、授業展開の改善点などを把握していく。

参考文献

ⁱ 松田恵示 山本俊彦 かかわりを大切にした小学校体育の365日：教育出版株式会社、2001

ⁱⁱ 「体育科教育」編集部『体育科教育2011.06 体育における「学び」の三位一体』 大修館書店（2011）